

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 細野香里

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 異 孝之 文学研究科委員、Ph.D.

副査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 大串尚代 文学研究科委員、Ph.D.

副査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 宇沢美子 Ph.D.

副査 カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授 マーク・セルツァー Ph.D.

副査 スタンフォード大学教授 シェリー・フィシュキン Ph.D.

論文題目 Double-faced Maps: The Georacial Imagination in Mark Twain's Works (裏返しの地図——マーク・トウェイン作品における人種的他者表象と地理的想像力)

本研究はアメリカ国民作家トウェインが、南北戦争以前にミズーリ州という境界州、すなわち奴隷州でありながらもアメリカ合衆国から脱退しなかった特殊な地域に生を享けたがために、時に南部作家とも西部作家とも捉えられながら、最終的には東部社会にて過去への反省と決定的な転向を余儀なくされていく複雑な歩みを克明に辿る。このプロセスにおいて、南北戦争以後の北米は 1890 年にフロンティアを消滅させ世紀転換期には米西戦争、米比戦争を経て帝国主義へ傾斜し、その領土拡張により力動的な地理的想像力を培うが、それが作家の人種表象にいかに関与を及ぼしたかを細野君は緻密に分析してみせた。

主論文各章は以下のように構成されている。

Introduction

Chapter 1

Retelling the Past: Mark Twain and P. T. Barnum's Art of Retrospective Narration

Chapter 2

From the Mekong to the Mississippi:
The Chinese-Siamese Twins in *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*

Chapter 3

The Tug of War between the West and the South: Two Orphans in *Adventures of Huckleberry Finn*

Chapter 4

Beyond the Territory:
Revisiting "Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians" and *Tom Sawyer Abroad*

Chapter 5

"Our Fellow-Cannibals":
Rereading Romances in *Letters from Hawaii* and Other Hawaiian Writings

Conclusion

In Search of the Happy Hunting Ground: "3,000 Years Among the Microbes" and *Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven*

論文の概要

中西部に位置する境界州ミズーリ州で育ったマーク・トウェイン(Mark Twain, 1835-1910)ことサミュエル・クレメンズ(Samuel Clemens)が、南北戦争を経験した19世紀アメリカにおいて、いかにアフリカ系をはじめとした人種的他者を巡る葛藤に向き合ったのか。本論は、これまで多くのトウェイン研究者によって吟味されてきたこの問いを、地理または地域を中心に再考する。具体的には、トウェインが人種的他者を表象する際に小説作品の舞台、あるいは旅行記で紹介する異国の地が喚起する地理的想像力をいかに技巧的に利用していたか、あるいは、そうした地理的想像力が、時に書き手の意図を超えて、作品世界にどのような効果をもたらしているかを吟味する。

トウェイン研究において、人種というテーマは飽和状態にある。*Adventures of Huckleberry Finn* (1885)における奴隷制の問題、そして本作品が書かれた再建期以後のアメリカにおける黒人に対する抑圧の問題はもちろん、アフリカ系以外の人種的他者を扱う議論も数多く提示されてきた。Shelley Fisher Fishkin による1994年の著書 *Was Huck Black?: Mark Twain and African-American Voices* をもって、トウェインとアフリカ系アメリカ人についての議論はひとまずの頂点を迎えた格好になり、以後、中国系移民やネイティブ・アメリカン（に対する直接的言及の少なさ）といったアフリカ系アメリカ人以外の人種的他者との関わりについての研究も発表されている。Hsuan Hsu による著作 *Sitting in Darkness: Mark Twain, Asia, and Comparative Racialization* (2015)がその例である。とはいえ、彼と人種的他者の問題はもう語りつくされたわけではない。

たとえば、トウェインの伝記的背景と人種観の変遷がいかに連動したかという問題。ミズーリ州の奴隷がいる共同体で育ったトウェインは、奴隷制を既成の社会制度として受入れ、南北戦争時には南軍側について義勇兵となった。しかしすぐに脱落し、戦時中に兄オーリオンとともに西部準州に向かい、西部出身のユーモア作家マーク・トウェインとしての名声を手に入れ、東部の良家の令嬢オリビアとの結婚を果たす。その過程で、奴隷制支持の思想を徐々に変化させ、1885年の作品 *Adventures of Huckleberry Finn* では主人公ハックに、逃亡奴隷のジムをかくまうという決断をさせるまでになる。いわゆる「南部人」としての出自が人種問題を巡る葛藤を生んで彼を苦しめ、西部作家という肩書が成功をもたらし、東部社会への参入が自身の過去についての更なる後ろめたさをもたらした。この意味で、トウェインにとって地域間の移動と、自身の過去、そして特に人種的他者を巡る個人的葛藤は深く結びついていた。Forrest Robinson は *The Author-Cat: Clemens' Life in Fiction* (2007)において、トウェインは、自伝ではなく創作作品でこそ自身の伝記的背景を間接的に、つまりより安全に語ることをできていたこと、よって彼の創作作品においては、自身の過去に折り合おうとするトウェインの葛藤がより露わになっていることを論じた。トウェインは書き手としての意図的な操作によって、あまり語りたくはない自らの過去に覆いをかけつつも、確実に創作作品にそれを反映させている。この指摘を踏まえ、本論では、Robinson の理論を発展させ、地理的想像力が利用されていた可能性を指摘する。トウェインが作家として構築してきた創作上の舞台は、トウェイン本人が実際にそこで過ごした過去と再訪した際に目の当たりにした変化、そして作中で描かれる虚構の世界観というように、同じ一つの「場所」を何層にも上書きすることによって、構築されている。このような重層的な舞台でトウェインはいかに人種的他者との邂逅を描きこんだかが、本研究の中核を成す。

19世紀アメリカが「明白な運命」のスローガンのもとに邁進した領土拡大と人種問題は切っても切れない。その領土拡大は、ネイティブ・アメリカン、アフリ

カ系アメリカ人、メキシコ人、そしてハワイをはじめとする海外領土の有色人種の抑圧と不可分であった。先住民の土地を収奪し、西漸運動を続け、そのまま太平洋へと進出したアメリカは、人種的他者を巡る葛藤を考える上でも、単なる地域性という言葉に集約されない地理的想像力を育んでいる。作家マーク・トウェインは、南北戦争を経て、奴隷解放、移民の流入、飛躍的な技術革新という目まぐるしい変化を遂げた 19 世紀中葉から世紀転換期にかけてのアメリカ社会を生き、体現した人物である。彼の旅路は、そのまま植民地あがりの後進国から「帝国」へと変貌するアメリカの歩みに重なる。本論文では、トウェインを巡る流動的・有機的な地理的想像力について、南北戦争を経て、世紀転換期に帝国主義に傾くに至るまでのアメリカ合衆国が辿った時代の変遷を考慮に入れつつ、異なる土地を舞台とした作品群の分析を通じて吟味する。具体的には、南北戦争以前の奴隷のいる共同体を描く *Adventures of Huckleberry Finn* と *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* (1894)、インディアン居住区を舞台とする未完の “Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians”、気球での大西洋横断の旅を描く *Tom Sawyer Abroad* (1894)、サンドイッチ諸島に取材する *Letters from Hawaii* (1866) と未完の原稿 “Sandwich Islands Novel” を扱う。南部作家とも分類されるトウェインは、奴隷制を巡る北部・南部の対立について常に意識的であった。トウェインは、先住民の土地を収奪し、西漸運動を続け、太平洋へと進出したアメリカ国家の人種的他者を巡る葛藤をなぞるように、西部ではネイティブ・アメリカンや中国系移民と、サンドイッチ諸島ではネイティブ・ハワイアンと出会い、彼らについての記述を残しているのである。

トウェインが、人種問題を主とした自身の過去を巡る葛藤を、地理的想像力を利用していかに作品創作に投影していたか、あるいはいかにそれが図らずも作品世界に影を落としているかを論じる前提として、彼の語りの技術に着目したい。トウェインの語りは、西部出身のユーモア作家マーク・トウェインとミズーリ出身のサミュエル・クレメンズという二つの人格の間での個人的葛藤を押し隠す鎧としての機能を持っていた。この技術は、東部進出以後のトウェインと同じくコネティカットを拠点として活躍した 19 世紀を代表する興行師フィニアス・T・バーナム (P. T. Barnum, 1810-1891) の用いた宣伝手法に酷似する。よって第一章では、トウェインの語りの技術を、バーナムとの関わりを通じて検討する。トウェインはバーナムと親交を育み、彼の見世物を創作に取り入れた。それだけではなく、奴隷所有者の息子であり元南軍義勇兵であるトウェインと、元奴隷の黒人女性の搾取を通じて名声を得たバーナムは、自身の過去を語り直す「語り／騙り」の技術を共有していた。このことを示すために、本章では、バーナムの「ジョージ・ワシントンの 161 歳の元乳母」ジョイス・ヘスの見世物とトウェインの掌編 “General Washington’s Negro Body-Servant” (1868) の分析、および 1880 年代後半の、南北戦争の英雄グラント将軍に対する両者の援助の試みといった伝記的背景をもとに論じる。そして結論部では、トウェインがバーナムにヒントを得た、*Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* (1894) における「半分の犬を殺す」冗談についての解釈を示す。

第二章では、南北戦争以前の南部の田舎町から始まる二部作 *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* と中国系の結合双生児チャンとエン (Chang and Eng Bunker, 1811-1874) を取り上げる。前半は白人と黒人の赤ん坊の取り換え子の行く末を描く悲劇、後半は町にやってきたイタリア人のシャム双生児が引き起こす混乱を活写する喜劇である。先行研究においては、白人の赤ん坊と黒人の赤ん坊の取り換え子という筋書のために、人種ロマンスとしての中編 *Pudd'nhead Wilson* が重要視されてきた。そこで、本章では、1869 年の掌編 “The Siamese Twins” にも注意を向けつつ、短編に登場するシャム双生児のモデルの一組となった中国系の双

子チャンとエンが、白人女性と結婚し南部大農園主として黒人奴隷を使役した点に注目する。

第三章では、*Adventures of Huckleberry Finn* の作品舞台の地理的曖昧性を、主人公ハックの人種的属性の曖昧性、そして書き手トウエインの地理的・人種的アイデンティティの曖昧性と重ね合わせて分析する。たしかにコミュニティから逸脱し出自の曖昧なハックは、多人種的連関(multi-racial association)を持つ存在である。作品の舞台である南北戦争以前のアメリカでは、南と北、あるいは南と西の区分は極めて流動的であった。こうした状況を反映するかのように、*Adventures of Huckleberry Finn* は、南部奴隷社会に背を向けミシシッピ川を南へ下るという矛盾を孕んでおり、また *The Adventures of Tom Sawyer* (1876) 序文や同時代の書評においては、その作品舞台は西部と想定されている。さらに、トウエイン自身も、自分はネイティブ・アメリカンの子孫であるとうそぶき、西部出身のユーモア作家という肩書を強調しながらも、南部奴隷社会という文化的背景を背負う。本章では、*Adventures of Huckleberry Finn* における人種的・地理的曖昧性が、作中でいかに互いに呼応し合い、独特の力学を生み出したかを示す。

第四章では、*Adventures of Huckleberry Finn* の続編作品“Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians”と *Tom Sawyer Abroad* におけるトウエインの人種を巡る葛藤と、作品舞台であるフロンティアと疑似的オリент世界の表象を検討する。いずれの作品もハックを語り手に、トムとジムを主要登場人物に据え、前者は西部地域での白人開拓者との出会いとネイティブ・アメリカンによる襲撃を、後者は気球での大西洋横断と、サハラ砂漠、エジプト、聖地を巡る旅を描く冒険譚である。本章ではまず、1884年に執筆されるも未完に終わった中編小説“Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians”において、彼が執筆時に参照したとされる同時代の西部探検の手記や、彼自身の西部への旅の記録を参照し、トウエイン自身のネイティブ・アメリカン観の変遷を短編小説や手記での言及を追って整理する。そして、前作 *Adventures of Huckleberry Finn* において、ハックが自由を求めて向かったテリトリーの地が、西部フロンティアの持つ神話性の衰えと呼応するかのように、理想的な「新規蒔き直し」の地とは程遠い、過酷な現実を突きつける場として描かれていることを指摘する。そして、失われたテリトリーという逃避先の代替地こそは、*Tom Sawyer Abroad* で展開される疑似的オリент世界なのではないかという解釈を示す。しかし、この疑似的オリент世界にも、ポスト再建期アメリカのアフリカ系アメリカ人の処遇の問題、そして帝国主義の兆が影を落とす。

第五章では、ハワイ関連著作と未完のロマンス作品を扱う。1866年、トウエインは *The Sacramento Union* 紙通信員としてサンドイッチ諸島（現ハワイ諸島）に滞在し、25の通信文を執筆した。そこには、トウエインの人種混淆に対する相反する感情、つまり、身体的に内面化された社会規範に従い人種混淆を忌避する思いと、それに反して人種混淆の禁忌に魅力を見出す心の動きが反映されている。この点について、帰国後トウエインが行った講演や、1870年の掌編“Dining with a Cannibal”に触れながら論じる。また1884年には、トウエインはサンドイッチ諸島で出会ったネイティブ・ハワイアンと白人の混血の通訳者、ビル・ラグズデイル (Bill Ragsdale, c.1837-1877) を主人公にした未完原稿 “The Sandwich Islands Novel” を残している。この“The Sandwich Islands Novel”を、同時期に執筆が企図された“The Man with Negro Blood”の草案を参照しつつ、未完のロマンスとして再構築する。これらのサンドイッチ諸島についての著作の再検討を通じ、トウエインの太平洋上の楽園とアメリカの拡張主義への態度の変遷を辿る。

審査の要旨

細野香里君による博士号請求論文“Double-faced Maps”は、アメリカ文学史上の正典作家マーク・トウェインの伝記的事実を丹念に辿りながら、それらの事実がトウェインの作品にどのようなかたちで現れているかを緻密な精読により明らかにしようとしたものである。その際、本論文が援用するのは地理的概念と人種意識の連動を括り取る人種地理 (georacial) という独特な鍵概念である。奴隷主の息子としてミズーリ州に生まれ、西部を旅し、東部に住み、ハワイやヨーロッパなどの渡航歴をもつグローブ Trotter としてのトウェインが培った人種地理学は一枚岩ではなく、それは昨今では心理地形学 (Psychotopography) の手法に接近しているが、まさにこの視点を据えたからこそ、細野君は 19 世紀後半において拡張主義政策に邁進するアメリカをみごとに掬い取っており、さらには、かつて人種混淆を忌み嫌っていたトウェインの罪悪感をも巧みに読み解いた。近年のトウェイン研究を踏まえ、今世紀に入って出版が解禁されたトウェイン自伝の完全版や、細野君がフルブライト研究員として留学したカリフォルニア大学バークレー校におけるマーク・トウェイン文書館の資料群をフル活用して慎重に発展させた議論は、新たな作家像の構築に大きく貢献するだろう。

以上の共通見解のもとに審査委員会は 2019 年 12 月 11 日夕刻、本塾東館 8 階小会議室において、公開口頭試問を行った。審査員の一人シェリー・フィッシャー・フィッシュキン教授は書面参加となったが、しかしこれに先立つ 11 月 7 日から 10 日までホノルルで行われた北米のアメリカ学会年次大会ではこの博論をめぐってフィッシュキン教授と細野君自身が直接面談する機会があり、そこで交わされた討議も審査報告書面には生かされていたことを明記しておく。

口頭試問は、本論文が最新の研究に準拠するトウェインの伝記的な事実が相当に援用されていることの意義を確認するところから始まった。トウェイン文学が往々にして伝記的かつ地図作成的、言い換えれば自伝的かつ脱アメリカ的な傾向を持つのは確かであり、細野君は作家個人の政治的転向とも言える歩みと国家アメリカの帝国主義を露わにしていく歩みとが絶妙に連動していくのを浮き彫りにする。特に第三章をはじめとするその他の章では、まさにこの視点からテキストを一層深く読み込んでいる。たとえば、トウェインの代名詞は国民文学のみならず世界文学としても挙げられることの多い『トム・ソーヤーの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』だが、これらの作品以後にも作家は同じ主役のシリーズを書いており、中でも細野君が“Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians”と *Tom Sawyer Abroad* に注目し、そこで扱われる本来はアメリカ西部を指す「フロンティア」と脱西欧的な「疑似オリエント」の両概念が相互補完的であること、しかも時代とともに刻々と変動するファクターであったことを実証したのは、本論文の大きな成果である。とりわけトウェインが描く気球旅行の分析は、彼が社会的政治的現実を宙吊りにしつつアメリカの本質へ鋭く斬り込む Transnational American Studies の一つの達成と言ってよい。

第 5 章ではトウェインの初期作品である *Letters from Hawaii* (1866) の精密な読解を中心に、ハワイの人種地理と病 (ハンセン氏病) の関わりを考察し、当初トウェインが病の要因を人種混淆に想定して拒否反応を示していたことの意義を吟味した議論が秀逸であった。トウェインは 1898 年にアメリカが米西戦争に突入し、それに米比戦争が続いた 20 世紀初頭には、少数民族を重視し帝国主義批判の先鋒と

なる。つまり、南北戦争直後のトウェインの保守思想を再吟味することによって、アメリカが世紀末から世紀転換期にかけ拡張主義政策転じては帝国主義を露呈していくのをつぶさに見たトウェインがいかに政治的転向を図るかが、一層明らかになるからである。

もちろん、いくつか討議すべきポイントがあったのは当然のことだ。

本博士論文が伝記研究的手法を採る限り、作家の著作活動に作用した読者、編集者の存在は大きく、その点ではその両方の役割を演じ切っていた妻のオリヴィアの検閲的関与と影響については問われねばならない。細野君はこの問いに応じて、妻のオリヴィアがトウェインに対し検閲者・読者としての役割をもっていたのみならず、それがいい意味で作家の彼女への積極的反応のもとになっていたことを指摘した。

また、第2章では結合双生児のチェンとエンを中国系ととらえ、それをモデルにした作品『間抜けのウィルソン』論を展開しているが、彼らはアイルランド系の姉妹と結婚しており、時代的には中国系と同様に、アイルランド系は依然として「有色人種」すなわち人種差別的対象だったことも討議された。論文中ではこの双生児を名誉白人という概念に回収するため、あえてアイルランド系を白人として単純化している。けれども、論文内でも指摘されているように彼らが白人社会に受け入れられた理由は *freaks* であり、*celebrity* であり、*rich* であり、*promiscuous* であるという複合的な理由によると思われる、単に白人の模倣に終始しただけではない複雑さを含む。将来の研究の深化に期待するところである。

さらに人種地理学では往々にして性差の問題と階級の問題が連動するのをどう捉えるかという問いに対しては、とくに5章で論じた未知なるフロンティアすなわちアジア太平洋空間の「女性化」問題を、今後（ホモ）セクシュアリティの問題を絡めるかたちで発展させていきたいという意欲的な展望が示された。

また序章や第5章では作家がかつて人種差別意識を抱いていたことに対する「罪悪感」が論じられているが、それは確かに現在の視点から考えると当然のように思われるものの、19世紀後半の言説空間においてそうした罪悪感がどこまで明確に培われていたのかという問いに対しては、申請者は、トウェインの人種地理意識が南北戦争から米西戦争を挟んで刻々と変容を遂げ、その結果、彼自身もイデオロギー的転向を図っていく歩みを辿るうちに、過去の反省というかたちで罪悪感を認識することが可能になったと明快に答えた。

書面参加ながら、最も本質的だったのは細野君自身がその方法論に多くを負っているシェリー・フィッシャー・フィッシュキン教授からの問いかけである。教授がハックルベリー・フィンの語りのうちに黒人文化を見出した画期的研究書 *Was Huck Black?* は1993年の出版以降多大なセンセーションを巻き起こし、以後のトウェイン研究を変えてしまった。フィッシュキン教授は自身の著書から明らかにヒントを受けた細野君が人種地理学を構築するに当たって、いかに同書を正確に理解したのか問いかけたが、それに対して細野君は *Was Huck Black?* があくまでハックルベリー・フィンの語りに焦点を絞っていた一方、自分は同書に影響を受けた先行研究のほとんど全てに目を通した上で、それらをあくまで批判的に発展させたことを具体的に説明した。ハックルベリー・フィンの主体そのものを多人種的と見ているのかという問いについても、細野君はこの主人公が奴隷制社会の周辺に育ってきたことに注目し「ハックは白人と非白人の間に位置する曖昧な存在」なのであって、彼個人が多人種的の主体を備えているのではなく、むしろ多人種的関係性のネットワーク内部に位置していると構想したことを明らかにした。現在のマーク・トウェイン研究の最高峰であるフィッシュキン教授に対しても決して怖気付くことなく堂々と建設的な対話を構築したことは、細野君のアメリカ文学研究者としての将来性を物語る。

以上の経緯を踏まえ、審査委員会は、本論文に散見される若干のケアレス・ミス
を修正するという条件を課した上で、細野香里君の論文を博士（文学）の学位授
与にふさわしいものと判断する。

(2020年2月14日)